

第7回風景デザインサロン●開催レポート

第1回風景デザインサロンの実施状況

去る平成20年7月26日(金)に、福岡市薬院にて、第7回風景デザインサロンを開催しました。

講師：樋口 明彦氏(九州大学大学院 准教授)

テーマ：九州の風景が持つ可能性

開催時間・場所：18:30~21:00 / I C O N E (福岡市薬院)

参加人数：24名

本年度第1回目のサロンでは、写真にこだわりのある樋口先生がご自分で撮影された九州や海外の風景写真をもとに、風景をマネジメントするとはどういうことか、また、マネジメントのために地理的な観点と歴史的な観点から九州の風景を見直すことが重要ということをお話して頂きました。



第7回風景デザインサロンの開催です

講演内容の骨子

1. 風景をマネジメントする

マネジメントとは、規制などによるコントロールのことではなく、ビジネスなどのように相手があって、対話しながら決定していくプロセスであり、その結果である。つまり風景をマネジメントすることは生態系を相手に自然との折り合いをつけながら、ということももちろん大切だが、現実の問題としてみると、現代日本のように全ての土地に開発の手が伸びている場合の風景マネジメントは、土地の所有者の誰かと対話し、譲歩しながら風景を作っていくことといえる。これからはマネジメントを行っていかないと長いスパンで見て九州の風景は良くなっていかない。また、今の所マネジメントを行える人材は九州にはあまりいない。現在行っている草の根的な活動を通じて時間をかけて世間に受け入れてもらう必要がある。

2. 九州の風景をいくつかの階層に分けて見る

1) 地理的なレイヤー

九州は地理的にみて、東京などのほかの大都市と比較すると、都市開発が成されているのは一部であり、郊外に出れば自然が多数残っている。昔は自分達の手でコントロールできないものは全て神として奉られていた。そうした自然の脈動を、その名残を現在も九州各地の地形にまだ感じることが出来る。これらの地形の作り出す風景の美しさや良さは土地に住む人間にとっては当たり前風景になっており内からは評価されにくい。例えば東南アジアの棚田風景は海外観光客から評価を受け、グリーンツーリズムやアジア文化の一部として観光資源になっているが、日本の棚田が中からアピールされることは少ない。こうした当たり前の風景が海外から見れば十分に魅力的に見える可能性があることをもう一度考える必要がある。

2) 歴史的なレイヤー

どこにでもありそうな風景でも、高千穂などのように古事記に出てくるとい歴史と結びついたとき、その風景にインパクトが生まれる。日本の中の歴史だけでなく、世界からの視点で日本を見ることで新しい魅力が発見できるのではないかと。例えば、日本は魏志倭人伝など昔の暮らしがわかるような史書が多く残っているが、世界的に見てもこうした記録が残っている国は希少である。また世界史上、キリスト教文化やお雇い外国人の残した偉業など西洋文明が日本に与えた影響などを掘り起こし、海外に向けてアピールすることも少ない。海外では、史跡をめぐるための良質なガイドがあり、日本人は海外に旅行に行き、歴史の史跡をめぐるその風景の写真をたくさん撮って帰ってくるが、逆が成立しない理由は何故なのかを考える必要がある。

3. 九州トスカーナ構想

トスカーナはイタリア南部の農村地域で、ヨーロッパやアメリカの観光客から最も注目されている観光地のひとつ。しかしその風景を切り取ってみるとそれほどトスカーナと九州に違いは見受けられず、今後トスカーナのように風光明媚な観光地になり得る可能性がある。それが九州の風景を良くしていくきっかけになる。最近九州に来る観光客は団体客でなく個々の観光客も増えてはいるが、彼らに向けたアピールはまだまだ足りない。九州がトスカーナのような海外からも注目されるようになるためには、現在の九州の風景を維持していくこと、そしてそれを外に知らせていくことが必要である。その過程をマネジメントしていく人材が必要不可欠である。こうした役割を担う人間は、既存のコンサルタント、建設会社、大学、自治体などのくりに在る人材ではなく、新しい職能を創出していくことになる。



桜島と鹿児島市



千枚田

白水堰堤



トスカーナ地方(イタリア)

質疑応答

樋口氏の熱心なご講演の後、質疑応答の時間を設けて意見交換をしました。残念ながら時間が足りず学生からの質問は受けられませんでした。風景デザイン研究会の会員メンバーから多くの質問や感想をいただきました。

主な質疑応答は以下のとおりです。

- 1) (質問) 九州はポテンシャルがあるが、日本人は気づかないのは日本人の謙虚な性質のためか？敗戦が非常に影響しているのか？どういう理由があって自分たちの良さを出せないのか？今後、ポテンシャルを世界に発信するためには、どういうふうにしたら良いのか？
(回答) それこそが自分達で考えていかなければならないこと。一人ひとりが努力していくこと。日本人はこういうことをしなければならぬというステレオタイプを求めがちなのが良くないのではないかと。
- 2) (質問) 景観計画と観光振興は密接なつながりがあると思う。また観光につなげると良いと提案すると行政の食いつきが良いが、現在は韓国や中国の団体客が多く、団体客向けの取り組みが多くなってしまふ。しかしこれからは個人客が魅力に気づくようにしていかなければならないと思うが、どうしたら個別客を呼び込めるか？団体客向けじゃない方向にどのように展開していけば良いか？何かアドバイスがあれば。
(回答) まず、旅行者がどういう人なのか知るところから始める。建設業界全体で業態の多様化(観光など)を考える必要がある。ジャックマイヨールが唐津を終焉の地に選んだことは有名だが、海外の人が九州の魅力に気づくことがある例は多い。その土地の住人が外から見た魅力に気づくことは少ないので、そういう掘り起こしが必要であると思うし、また、そうした取り組みが実を結ぶのは最低10年はかかるため、コンサルタントは自治体と話をする過程で、長期的な目標を持ちつつ、具体的な提案は短期的な取り組みを継続して行うということが必要であると思う。
- 3) (質問) 写真が素敵でした。大宰府は市民遺産という活動を行っているが、九州をトスカーナのようにするために大宰府をどう位置づけるか？
(回答) 最近まで大宰府のあたりはほとんど知らなかったが、韓国の司馬遼太郎のような人が百済の様式の城を見たいとやってきた時に、案内で一緒に回ってその全貌に驚いた。大宰府の後ろの大野城はみなお城で、実際に百済の様式のまっすぐな石壁が残っていた。そのような大野城の土地を前提に、その麓に大宰府も建設されたのではないかと。こうした歴史など、もっと違うアピールの仕方があるのにと今このところ大宰府は梅ヶ枝餅しかない。大宰府周辺も現在のように整えられたのは最近のことで、まだまだこれからやることはあるのではないかと。例えば風景を独占するようなマンションが乱立する状況があるが、これは非常に考えていかなければならないこと。大宰府のように地の霊を大切にするような土地に住むことの方が必要なのではないだろうか。
- 4) (質問) トスカーナとマネジメントの話に戻るが、現在のトスカーナの状況には出来上がった歴史も影響するだろうが、トスカーナが世界に向けて情報を発信する中で、マネジメントが関わっているとすれば何であるか？また、特に樋口先生が九州の人間と関わる中でトスカーナのようなマネジメントの切り口になる人材はいたかどうか？
(回答) その話だけでもう一回講演ができる内容。たしかにマネジメントのシステムがイタリアにもある。それが日本に通用するかはわからない。しかし、参考にしながら九州バージョンを作らなければならない。しかしそれはある限定的な職能だけが作れば良いわけじゃなくて、トスカーナは基本的に農地の風景だから農業が成り立つ、という意味では別の次元の話が入ってくる。九州は農水省の施策が入ってくる前は二毛作、二期作が当たり前だった。志摩町も夏は米を作って、冬は麦をつくる。春には麦刈がある。知らなかったが、志摩町は日本でも有数の良質の麦が作れる土地であり、地元の住民がレストランを営み、パンも作っている。そういう人もいるが、ほとんどの農家は何も考えずに農業をし、暮らして来られた2000年近い経緯がある。トスカーナも同じなのだけれど、彼らは政権が安定していなかったために一つの村が都市国家とまでは行かないが、戦いの中で自分達を守ってきた経緯がある。日本は九州だと強い大名たちに守られ、安定した生活が出来た。しかし、第二次世界大戦後、農地改革で個人主義になってしまった。しかしやはり地元のよさに気づいて活動する人がいるので、そういう人たちがキーとなるだろうし、そういうことが九州は出来る土地である。



唐津城 (唐津)



虹の松原 (唐津)



参加者も熱心に聞き入っていました

次回の予定

次回サロンの予定は、次のとおりです。皆さん奮ってご参加下さい。

講師：福島綾子氏(九州大学大学院芸術工学研究院助教)

テーマ：文化的景観と九州の風景

開催日時：平成20年8月22日(金)18:30から2時間程度

開催場所：I C O N E(福岡市薬院一丁目)予定